



ブラティスラヴァ世界絵本原画展 第21回展グランプリ受賞作品 アイナール・トゥルコウスキィ “Es war finster und merkwürdig still” ©Einar Turkowski

Topics

インドネシア更紗のすべて — 伝統と融合の芸術

ブラティスラヴァ世界絵本原画展 — 歴代グランプリ作家とその仕事

手仕事の美

現代美術の夏休み

All about Batik

; Art of Tradition and Harmony

インドネシア更紗のすべて

— 伝統と融合の芸術



図1 鳥居清長《美南見十二候 六月》千葉市美術館蔵



図2 百川子興《蚊帳二美人》千葉市美術館蔵



図3 歌川国芳《風俗女水滸伝百八番之内 炬燵》千葉市美術館蔵

更紗さらさら世界をめぐる

更紗

更紗、異国への憧れをかきたて、南蛮の薫りがただよってくるような言葉。さらさという音の響きから布の手触りまで感じさせる。「更紗」という漢字はあて字で、その語源はインドで極上品の木綿織物を指して用いられたサラサーに由来するという。安土桃山時代から異国よりもたらされた、一面に文様を染め上げた(描いた)布の総称が更紗であり、そこに表された異国の花鳥、人物の模様が転じて更紗模様と呼ばれた。異国の模様染である更紗は友禅染のような江戸時代における日本の模様染の発達にも影響している。

東へ西へ

インド更紗は南蛮船、オランダ船によって東へ運ばれ日本に届いた。江戸時代の日本で更紗は珍重され、彦根藩井伊家に伝来した更紗のコレクションが現在東京国立博物館に所蔵される。安永・天明期(1772-1789)には更紗の模様を紹介する本や製法を記す本も相次いで出版された。また、更紗を真似て「和更紗」も国内で作られた。高級品としては鍋島藩の「鍋島更紗」などがある。その一方、異国的な模様を写しただけの安価なものも多く出まわり、人々の生活を彩った。鳥居清長「美南見十二候 六月」(千葉市美術館蔵 図1)の後ろ向きの女性の黒い帯や百川子興「蚊帳二美人」(千葉市美術館蔵 図2)の団扇を持った女性の帯の模様は、厳密には更紗ではないとしても、天明・寛政期(1781-1801)の更紗愛好を示しているだろう。歌川国芳「風俗女水滸伝百八番之内 炬燵」(千葉市美術館蔵 図3)の炬燵の上掛けも、下着やふとんなどの日用品に用いられた量産品の和更紗と見たい。

そして更紗は西へも運ばれた。17世紀中ごろからはヨーロッパの消費者の好みに合うインド更紗が注文された。オランダ東インド会社はコロマンデル海岸に拠点をもち、イギリス東インド会社はスラトからロンドンに更紗を運んだ(この港町の名がかつて更紗の語源と考えられたこともある)。

インド更紗の影響を受け、その技術を導入して東部地中海沿岸地方レヴァントでも更紗が作られ、更にレヴァントから技術が伝わって西ヨーロッパでもアムステルダムやマルセイユで更紗の現地生産

が行われるようになる。現在南仏らしい柄として人気を集めるプロヴァンスのファブリックもまた更紗の子孫である。

バティック

「インドネシア更紗のすべて」展はスマトラ島、スラヴェシ島の更紗も含まれているが、その多くはジャワ島のバティック、ジャワ更紗である。ジャワ更紗はインド更紗を模倣して王宮で作られるようになったと考えられている。

ジャワ更紗の特徴として、まず蠟防染であることが挙げられる。色ごとにその色を染めたくない部分に蠟を染み込ませることを繰り返して模様を染め上げる。現在バティックはジャワ更紗のみならず蠟防染の模様染全般を指す用語としても用いられている。本来木綿の両面染だが、絹のバティックも存在する。

バティックは18世紀中ごろにはすでに日本でも存在が知られており、天明7(1787)年刊森島中良『紅毛雑話』に「バテッキ」として蠟染めの技法が紹介されている。江戸時代に愛好された更紗の中にすでにジャワ更紗も含まれていた。

バティックの多彩な文様の中に更紗の文化的多様性を感じさせるものがある。プカロガンのファン・セイレン工房で作られた「花束文筒型腰衣」(戸津コレクション、図4)に見られる花束文様は、オランダ系女性がヨーロッパの意匠を取り入れて生み出した。この華やかな文様が大流行して、日本では「花更紗」として知られる、プーケタンと呼ばれる一群のバティックが成立した。花束文様は他地域にも波及し、中国系の工房でも作られ、中国の意匠の影響をも取り込んで発展した。インド更紗が伝わってできたジャワ更紗の文様に西洋の意匠が取り入れられ、さらに中国的にアレンジされる。

インドで起こり、東西へ運ばれ、各地で愛され、制作されるようになった更紗。ジャワ更紗に西洋の意匠が取り入れられて新しい文様が生まれたり、インド更紗の技術が伝わったヨーロッパでも独自の文様の更紗が作られたりした。更紗は世界をめぐり、世界とつながっている。布である更紗は美しいものとしてただ鑑賞されるだけでなく実用品として使われて、生活を彩ったのだ。

[学芸員 伊藤紫織]



図4 ファン・セイレン工房《花束文筒型腰衣》部分、戸津コレクション

関連イベント

■ ファッションショー

6月8日(日) 11:00より・14:00より 1階さや堂ホールにて

*参加無料・申込不要

インドネシア更紗を用いたファッションとガムランを素材とするデジタル・ミュージックによる玉川大学芸術学部ミュージアム・プロジェクト ビジュアル・アート・ショー

■ 講演会

6月28日(土) 14:00より 11階講堂にて 先着150名・聴講無料

【講師】小笠原小枝(日本女子大学教授)

7月13日(日) 14:00より 11階講堂にて 先着150名・聴講無料

【講師】戸津正勝(本展監修者、国士舘大学政経学部教授)

■ バティック試着会

6月21日(土)、6月29日(日)、7月5日(土)、7月12日(土)、7月20日(日)

いずれも14:00~17:00 9階講座室にて

対象:身長100センチ以上のお子さまと女性

*参加無料・申込不要

■ 担当学芸員によるギャラリートーク

6月4日(水)、6月20日(金) いずれも14:00より

*チケットをお持ちのうえ、8階展示室入口にお集まり下さい。

インドネシア更紗のすべて — 伝統と融合の芸術

2008年6月3日(火)▷7月21日(月・祝)

10:00 - 18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(7月7日)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は前売、団体30人以上、および市内在住60歳以上の料金

*前売券は、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(7月21日まで)にて販売

参考文献

小笠原小枝「更紗」『日本の美術』175 1980年12月 至文堂

『インドネシア更紗のすべて—伝統と融合の芸術』展図録(展覧会監修 戸津正勝)

2007年 朝日新聞社・町田市立博物館

深沢克己『商人と更紗』2007年10月 東京大学出版会

手仕事の美



図3 橋口五葉《化粧の女》1918年

今年度の所蔵作品展は、全て企画展と同じ会期で開催いたします。そこで、企画展の内容から連想するテーマを引き出し、そのテーマに基づき、個々の作品の時代や分野を越えて展示してみようという試みで進めていくこととしました。「インドネシア更紗のすべて」展に対する今回の所蔵作品展は「手仕事の美」。ろうけつ染めという手による仕事の究極である点に注目し、当館コレクションのなかから緻密な手仕事の光る作品群をじっくりとご覧いただくというものです。採算度外視で贅を尽くして制作された非売品の配り物である「摺物」や、浮世絵以来の木版画の伝統技術と美意識を見直した「新版画」の世界などを、これまであまりご紹介の機会がなかった作品の関連資料とともに展示いたします。

出品作品の中心は日本の近代版画の分野となりますが、まずは、伝統的な木版画の技術が頂点に達した江戸時代後期の錦絵から、特にその技法や制作者に注目しつつ紹介します。例えば、摺物の黄金期と言える文政期(1818-1829)に色紙判サイズの狂歌摺物を多く手がけた絵師に魚屋北溪(1780-1849)がいますが、「武者松竹梅番続」(図1)ほかの作品の下絵が、『摺物下絵校合摺貼込帖』(図2)に貼り込まれて残っています。これはとても面白い資料で、制作過程が知られることで意義深いだけでなく、北溪が余白にあれこれとスケッチしたりサインの練習のような筆あとなどが見られ、絵師本人の息づかいを感じることができます。



図1 魚屋北溪《武者松竹梅番続 竹 篠塚伊賀守》



図2 魚屋北溪『摺物下絵校合摺貼込帖』より

近代では、明治末からの浮世絵版画再考の動きの中で、浮世絵商から出発した渡邊版画店の渡邊庄三郎(1885-1962)が大正初めに「新版画」を唱えて創始した、当時の浮世絵版画に挑戦するかのような冒険的な作品の数々が、版表現の美質とゆたかさを見事に伝えてくれます。この渡邊庄三郎と組んで、大正半ば以降日本の風景版画に専念した川瀬巴水(1883-1957)や、渡邊と記念すべき新版画運動の第一作《浴場の女》を共作の後、私家版での制作で珠玉の作品群を遺して夭折した橋口五葉(1881-1921)の作品(図3)については、このところ「いつ展示するのですか?」とお問い合わせをいただくことも多く、実は久しぶりにまとめてご覧いただけるように計画していました。この二人の版画の制作過程を示す資料も所蔵しておりますので、この機会にあわせて多数ご紹介いたします。現代に残ることの珍しい版木のセット(図4)や、一工程ごとに別紙に摺り分けて木版画の摺りの手順がわかるように仕立てた「順序摺」(図5 色版の摺りを25回も重ねてようやく1枚が完成します。写真はその12、13回目の摺りの部分)のほか、下絵、試し摺り、校合摺などです。

版画の彫り摺りを手がける職人の仕事は、絵師ほどに語りつがれることがありません。近代でも「自画自刻自摺」を基本とする「創作版画」家の制作の方が注目されるものですが、職人の技に支えられての版画も大きな時代的役割を果たしており、この観点から彫師の伊上凡骨(1875-1933)や摺師の西村熊吉(1861-?)という当代の名コンビほかの仕事も紹介します。

本展が、制作現場の息吹を伝え、多くの作品の完成度に改めて向き合えるような機会となれば幸いです。会場では、丹念な作業のあとをじっくりと鑑賞することで、はじめて豊かな表情が見えてくる、現代美術のコレクションもあわせてお楽しみ下さい。

[学芸員 松尾知子]



図4 川瀬巴水《日本風景選集 鹿兒島桜しま》の版木 5枚(表裏)一式のうち



図5 川瀬巴水《社頭の雪(日枝神社)》の順序摺

手仕事の美

2008年6月3日(火)▷7月21日(月・祝)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 第1月曜日(7月7日)

【観覧料】	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

* ()内は団体30人以上の料金

* 同時開催「インドネシア更紗のすべて」展のチケットをお持ちの方は無料

現代美術の夏休み

ある作品を前にして、頭のなかに「？」(疑問符)しか浮かばないようなこと、ありませんか？ そんな時、ふと思いついたひとつの言葉から気分がほぐれたり、愉快的連想へと誘われた記憶はないでしょうか？あるいは何かほかの作品をイメージして、くらべることから対話の糸口を探すような経験は？

真夏の所蔵作品展は、「現代美術の夏休み」と題してみました。夏休みだから作品は収蔵庫に帰省して展示室は空っぽ...という落ちではありません。選りすぐりの戦後美術が並びます。展示を特徴づけるのは、ささやかな「キーワード」と「とりあわせ」。何らかの言葉で結ばれた作品たちがペアを組んで登場します。キーワードは、同時開催の「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」を訪れる小さなお客様にも親しんでいただけるよう、身近でわかりやすいものを選びました。

たとえば、少女の横顔がぼんやりと宙に浮かぶイケムラレイコの《顔》と、油彩や水彩、印刷物の切抜き、紐などのコラージュが顔らしきものを構成する草間彌生の《夏》。2点はいずれも作者自身を映しているということで、キーワードは「私を描く私」。自分の顔は画題としてはとても古いものですが、現代の作家たちは実にさまざまな手法をもって、その奥にある複雑で、時に不可解な心を表現しています。

「名前と中身」というテーマで結ばれるのは鈴木治《一本ノ木》と伊藤誠《MOUNTAIN》。「木」や「山」と名づけられながら、前者は「土」を焼成したまっすぐな柱であり、後者はF.R.Pという素材で作られた工業製品のような立体です。タイトルと作品の不思議な関係について考えてみるのも面白いもの、なかなか一筋縄ではゆきませんが、そこには作者の意図だけでなく、性格や癖が表れることも多いようです。

吉澤美香《無題(茶だんす)》と川端実《Dark Oval》には、「このひと筆!」というコピーをつけてみました。吉澤美香の作品は、たんに



吉澤美香 《無題(茶だんす)》1982年



イケムラレイコ 《地平線》シリーズより 顔
1997年



伊藤誠 《MOUNTAIN》1999年

落書きをしてしまう痛快さにばかり目がゆきがちですが、よくよく見ると、茶碗や和鉄を描く自在で勢いのあるタッチが実に魅力的です。川端実の作品も、思いきって動かした手の軌跡が画面に極上の緊張感をもたらしています。入念に選ばれた、やり直しのきかないひと筆。息をつめ、一瞬の動きにかける作家の気分が伝わってはこないでしょうか。

もちろんこうした「キーワード」と「とりあわせ」はひとつの提案にすぎません。作品を見る角度や物差しは限りなく存在するのだと思います。ただ、フロアを巡ることで現代美術の表現の幅広さ、作家たちがどれほど多彩な、時に奇想天外な冒険に挑んでいるかを実感していただけたらうれしいです。

雨の多い季節、そろそろ「夏休み」という甘い言葉が頭をよぎる頃でしょう。休みの長いかたも、短いかたも、あるいは「夏休みなんてない!」というかたも。真夏の一日を、アートのある広々とした空間で過ごしてみたいかがでしょうか。涼しい展示室があなたをお待ちしています。難しいことはさておき、気を楽しみ。だって夏休みなんですから。

[学芸員 西山純子]

現代美術の夏休み

2008年7月29日(火)▷9月7日(日)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(8月4日、9月1日)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

*同時開催「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」のチケットをお持ちの方は無料

ブラティスラヴァ 世界絵本原画展

—歴代グランプリ作家とその仕事—

誰もが子どもの頃親しんだ絵本ですが、最近では、展覧会などでこれらの原画を目にする機会も増えてきました。当館では2005年の夏以来3年振りの紹介となる「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」は、スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァで2年に一度行われている絵本原画の国際コンペティションです。2007年の9月から10月にかけて開催された第21回展には、38の国から388人のイラストレーターが参加し、2,740点の原画と477冊の絵本が審査対象となりました。この夏の展覧会では、それらの中からグランプリをはじめとする受賞者11名と日本から参加した18名の作品を中心にをご紹介します。

ベテランたちをおさえて今回グランプリを受賞したのは、ドイツの若手作家アイナール・トゥルコウスキです。トゥルコウスキは、ロゴやポスターなど広報デザイン分野で活動した後、大学でイラストレーションを学び、卒業後まもなく発表した最初の絵本『Es war finster und merkwürdig still』（『暗くて奇妙に静かだった』日本未出版）での受賞となりました（本誌表紙に図版掲載）。色彩豊かな作品が多く並ぶ中、鉛筆だけで描かれたモノクロームの世界は異色ともいえますが、その精緻な線が作り出す詩的で、やや毒のあるユーモアの効いた不思議な世界に、私たちはいつの間にかひきこまれてしまいます。

グランプリの他、金のりんご賞・金牌それぞれ5名ずつが審査によって選ばれました。デンマーク、スロヴェニア、ロシアなどの他、近年この分野でめざましい活躍を見せている国イラン（前回のグランプリ受賞作家アリ・レザ・ゴルドウジャンもイラン出身）の作家ファーシッド・シャフィイーの色鮮やかな原画や、社会主義体制時代からの伝統に支えられたポーランドからは独特の世界観を持つマリア・エキェルの作品など、そのほとんどが日本ではなかなか目にする機会のないものといえるでしょう。

展覧会の歴史の中で高い評価を受けてきた日本からは、18人の個性豊かなイラストレーターが参加しています。海外作家による受賞作品とは異なり、こちらは国内の書店で実際に手にすることができる絵本ばかりです。会場では、原画ならではの迫力と画面にこらされた創意工夫の数々をお楽しみいただきたいと思います。

また、展示の後半では、初回から第20回展（2005年開催）までの歴



ファーシッド・シャフィイー “Zarbal”（金のりんご受賞）©Farshid Shafiee



マリア・エキェル “Basnie i legendy polskie”（金牌受賞）
©Maria Ekier



ベンテ・オーレセン・ニストロム “Hr. Alting”（金牌受賞）©Bente Olesen Nyström



出久根育 『マーシャと白い白鳥』 ©出久根育

代グランプリ作家とその仕事をご紹介します。記念すべき1967年の第1回展では、日本人の作家、瀬川康男が『ふしぎなたけのこ』でグランプリを受賞しています。以降、40年の間、日本からは多くの作品が参加していますが、1999年の第17回展では中辻悦子、2003年の第19回展では出久根育の両名がそれぞれグランプリを受賞しました。現在チェコで活動する出久根育の絵本は、ロシア民話を再録した『マーシャと白い鳥』が、今回も日本からの代表作品の一つに選ばれています。

歴代グランプリ作家の多くは、現在もイラストレーターとして活躍していますが、出版事情の厳しかった時代や地域の絵本(だからこそ、原画での審査が求められたのですが)や、国内のみで出版された場合は、入手が困難なものも少なくありません。今も鮮やかな色をとどめる原画を前にするとき、この絵本原画展の長い歴史と、評価を与えてきた絵本それぞれが持つ背景に思いを向けずにはいられません。

ブラティスラヴァ世界絵本原画展は、原画の国際コンペティション部門を中心としながら、複数会場で行われるシンポジウムや関連する展覧会を含め、まちをあげてのにぎやかなイベントとして開催されています。今回の展覧会では、その楽しい雰囲気の一部も、皆様にお伝えできればと思います。

[学芸員 山根佳奈]



展示会場の様子



ブラティスラヴァ旧市街



第21回展のポスター

ブラティスラヴァ世界絵本原画展

—歴代グランプリ作家とその仕事—

2008年7月29日(火)▷9月7日(日)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(8月4日、9月1日)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は前売、団体30人以上、および市内在住60歳以上の料金

* 前売券は、千葉市美術館ミュージアムショップ(7月21日まで)、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(9月7日まで)にて販売

ボランティア日和 番外編

千葉市美術館のボランティアって、何してるの?どんな人たちがいるの? そんなみなさんの声に応えるかたちで始まったこのコラム「ボランティア日和」も、早いもので、これまでにご紹介したエピソードは16を数えます。現在、30人がスタッフとして登録していますので、ほぼ折り返し地点といえます。

4年間のあいだに、様々なメンバーが登場しました。しばしば話題に上った企画展での「ギャラリートーク」は、平成15年のボランティア活動開始当初から続けているもので、現在は会期中の毎週水曜日に定例として実施しています。展覧会のチラシにも載せられるようになって、お客様の間にも浸透し、楽しみにして下さる方も増えてきました。同じ展覧会でも、トーカーによって異なる楽しみ方が提案できるのが、この活動のおもしろさといえるでしょう。

小中学生の団体鑑賞をサポートする鑑賞リーダーは、ここ数年は年間20校程度の学校を迎えています。子どもたち一人一人との出会いを大切にしつつ、初めての美術館でリラックスした時間が過ごせるよう、皆で相談しては試行錯誤を繰り返しています。リーダーにとっては、作品と向き合った子どもたちの反応に触れることが何よりのエネルギー源となっています。

ボランティア活動が少しずつ軌道に乗りはじめた頃から、自分た

ちでワークショップを企画運営するようにもなりました。千葉市美術館らしさって何だろう、そのようなことを考えながら、多くの方に美術館や展覧会を身近に感じていただけるよう、自主的に集ってアイデアを出し合います。活動は館内にとどまらず、近隣の商店街のフリーマーケットに参加したこともありました。

これらのエネルギーはいったいどこから来るのでしょうか。数年来、担当者としてともに過ごしてきた私は、好奇心とあらゆる出会いを楽しむ気持ちが、ボランティア活動の原動力ではないかと感じています。このコラムを通して、読者のみなさまには、美術館のボランティア・スタッフが取り組んでいる様々な活動はもとより、「ボランティア」でくられた時には見えてこない、この活動に対する個々人の思いをご紹介します。メンバーは様々ですが、人と作品、人と美術館の良い出会いをサポートするのが美術館ボランティアの役割、お客様に美術館を楽しんでいただけるよう、お迎えしたいという気持ちに変わりはありません。それでは、エピソード17以降も、どうぞお楽しみに。

* 美術館ボランティアの募集は、今年度は行いません。

[学芸員 山根佳奈]

◎「佐藤陽子トーク&ミニコンサート」を開催しました。

2008年4月19日(土)、企画展「池田満寿夫一知られざる全貌展」にあわせ、佐藤陽子さんのミニコンサートを開催しました。抽選に当選された150人が会場の1階さや堂ホールを埋めるなか、情熱的な演奏と、池田満寿夫の無垢な素顔を偲ぼせる長年のパートナーならではの話をうかがうことができました。

1階さや堂ホールにて。(毎日新聞社提供)
「池田満寿夫の個展が開かれ続け、その会場で話したり演奏したりできることはとてもありがたい」と佐藤さん。



◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は「江戸」をテーマとして、当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

【時 間】 14：00より(開場は30分前)

【場 所】 11階講堂

【定 員】 先着150名(入場無料)

- 第2回 6月29日(日) 「近代から見た江戸」
【講師】 藁科英也(本館学芸係長)
- 第3回 7月19日(土) 「見直される手技—近代の錦絵」
【講師】 西山純子(本館学芸員)
- 第4回 8月30日(土) 「死絵になったスター」
【講師】 伊藤紫織(本館学芸員)
- 第5回 9月27日(土) 「ナンバーズ
—江戸時代絵画と数をめぐって」
【講師】 松尾知子(本館学芸員)

◎千葉市美術館「友の会」会員募集中

会員の特典

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズが10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 11階「かぼちゃワイン」での飲食代が、5%割引になります。
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。

	一般会員	学生会員 (大学・専門・高校)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会の申し込みは美術館受付にて。

【問い合わせ】 千葉市美術館 TEL. 043-221-2311



【交通案内】

- JR千葉駅東口より徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- 地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.ccma-net.jp>
【発行日】 2008年6月6日
【印刷】 半七写真印刷工業株式会社

 千葉市美術館
Chiba City Museum of Art